

【自著紹介】 浅利文子『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房 2021年5月）



本書は、前著『村上春樹 物語の力』（2013 翰林書房）以降、主として法政大学国際文化学部『異文化』と、淡江大学出版中心の『村上春樹研究叢書』に書いた論文をまとめたものです。

I 「齟齬と分裂の物語」第1・2章と、II 「過去から引き継がれた物語」第3～6章という2部構成です。I では、主に短編集『回転木馬のデッド・ヒート』、『ノルウェイの森』、『スプートニクの恋人』を取り上げました。短編集『回転木馬のデッド・ヒート』を取り上げたのは、長いこと、前書きの内容と、次に挙げた末尾の文の晦渋な言い回しが気になっていたからです。

我々が意志と称するある種の内在的な力の圧倒的に多くの部分は、その発生と同時に失われてしまっているのに、我々はそれを認めることができず、その空白が我々の人生のさまざまな位相に奇妙で不自然な歪みをもたらすのだ。

この短編集に収録された八短編を執筆順に並べ替え、その内容を検討した結果、結局、この文は、各作品の登場人物が経験する精神と肉体、すなわち意識と無意識の乖離が、当人にそれぞれ何らかの精神的あるいは肉体的症状を及ぼすということを描いていたのだと確認できました。

『ノルウェイの森』に回転のイメージが表出されていることは、前著『村上春樹 物語の力』でも指摘したのですが、この回転のイメージは、『回転木馬のデッド・ヒート』の前書きを端緒として、『ノルウェイの森』を経て『スプートニクの恋人』まで引き継がれています。この三作品に描かれたとめどない回転のイメージは、様々な理由で他とつながることを阻まれた、現代人の精神の深刻な孤絶を表象しています。この回転のイメージのつながりによって、短編集『回転木馬のデッド・ヒート』と『ノルウェイの森』、『ノルウェイの森』と『スプートニクの恋人』に、今までほとんど指摘されなかった関連性が認められることを論じたのが、I の主な内容です。

II では、長編三編『海辺のカフカ』、『1Q84』、『騎士団長殺し』と、『猫を棄てる——父親について語るとき』（以下、『猫を棄てる』と記す）を取り上げました。長編三編を論じた第3章、第4章、第5章では、前著『村上春樹 物語の力』で紹介した、境界領域から立ち上がって来る物語という村上独特の物語の生成過程に沿って作品分析を試みました。

『海辺のカフカ』を初めて読んだとき、私は、複式夢幻能の世界を感じました。それで、何がそう感じさせるのか、まず自分が納得したくて論文を書こうと思いました。また、『海辺のカフカ』以降、漱石『坑夫』や『源氏物語』『雨月物語』等の日本文学が作品中に引用されるようになった点に、作者の日本や日本文学に対する意識の変化を窺うことができました。作品全体の構成は、二本のストーリー・ラインの並行と見ることができます。すなわち、一本は、カフカを中心として展開する

奇数章の「<父殺し=システムとの闘い>の物語」、もう一本は、ナカタを中心に展開する「<異界往還による生の意義回復と鎮魂>の物語」です。

余談ようですが、2013年に公開された映画『ハンナ・アーレント』（作中でカフカが読んだ「アドルフ・アイヒマンの裁判について書かれた本」は、ハンナ・アーレントの『イエルサレムのアイヒマン』だと思われます）や、2014年夏に再演された蜷川幸雄の『海辺のカフカ』の舞台（宮沢りえが佐伯さん、藤木直人が大島さんを演じました）は、どちらも非常に印象深い作品で、『海辺のカフカ』の作品世界の奥深さと世界的広がりの実感したことでした。

『1Q84』は、天吾と青豆のラブ・ストーリーという体裁をとりつつ、オウム真理教事件に巻き込まれて被害者となった人々と、加害者側に立たされた人々のために書かれた物語と考えられます。人々はなぜカルトに取り込まれてしまうのか、なぜそこから逃れられないのかという問いに対し、村上は、無数の人々の時代意識の表象として、ティム・オプライエンの『世界のすべての七月』の第5章のタイトルに因んだリトル・ピープルという存在を登場させました。一方、作家志望の天吾にリトル・ピープルに対抗するための物語の効能を語らせ、媒介者（メディエーター）・ふかえりには、口承物語を語らせます。また、ふかえりのように村上の物語世界にしばしば登場する媒介者（メディエーター）や、レシヴァ、パシヴァという存在を造形する上で、心理学者ジュリアン・ジェインズの『神々の沈黙——意識の誕生と文明の興亡』（1976、邦訳2005 紀伊國屋書店）から大きなヒントを得ている可能性にも触れました。

『騎士団長殺し』は、短編集『女のいない男たち』所収の「ドライブ・マイカー」、「木野」、「独立器官」等で提出された自己探求の問題を受け継ぎ、深化しています。また、肖像画家である主人公「私」が雨田具彦という日本画の大家と魂のレベルで共鳴を経験して成長を遂げるという展開から、芸術論として読むことも可能です。さらに、「私」が絵画を描くことは、<影>を自分自身の一部として受け入れ、自ら物語を生きることと同義であると描かれています。こういう意味で、『騎士団長殺し』を「邪悪なる父を殺す」物語として読むこともできます。

第6章では、『猫を棄てる』の発表によって、『騎士団長殺し』が村上の亡父のための鎮魂の物語であることが明らかになり、それによって、村上春樹の作家としての原点がようやく判明したことを書きました。村上は、戦地で「兵にして僧なり月に合掌す」という句を詠んだ亡父が、戦後の復興と経済的発展の中で、戦争体験のトラウマを背負ったまま、多くを言葉にせずにごまかした運命と苦悩を、雨田具彦・継彦兄弟に投影しました。また、鎮魂という観点から見直すと、『騎士団長殺し』にも複式夢幻能の要素を見ることができ、そこには、魂の救済と新たな生を生き直す可能性を見出そうとする姿勢が認められます。そして、ここに、世界中の読者を惹きつけて止まない村上文学の真骨頂が現れています。

最後に、前著の表紙装画「豹」に続き、今回も表紙の装画に「好奇心」を使うことをご快諾くださった日本画家の鶴飼義丈氏が、2019年に続き、今年も巨鯨を描いた「共に泳ぐ。」で、二度目の特選を受賞されたことをご紹介します、この場をお借りして、心からお祝いを申し上げます。

【浅利文子（日本近現代文学）】